

## 体験記 ライティング支援連続セミナー 知識と言葉をめぐる冒険

事実?意見? Lesson 1  
図表を文章で表現する

教育イニシアチブ機構  
野村港二 先生

中央図書館ラーニング・アドバイザー 人文社会科学研究科 金瑜真 さん



野村先生のセミナーは、目の前の事象を言葉で表現することの難しさについて、身を持って体験することから始まりました。まず、先生は、参加者にピンクの紙を配り、「これから、この紙を半分に分ります。そして、右上をちぎります。これと同じ作業を、さらに2回繰り返してください。」と仰いました。しかし、その結果は思いがけないものでした。完成した紙は、参加者によってバラバラで、真ん中に穴が出来た人もいれば、穴が偏ってしまった人もいました。先生は、「私は、どう折るか正確に指示しませんでした。言葉とは、これぐらい伝わらないものです」と仰いました。

次に、先生は、参加者に植物の葉っぱを1枚配り、「葉を観察したり、手で触った感じを言葉にしたりしてみてください」と仰いました。参加者からは「表面がつるつるしている」「裏はさらさらしている」等の答えが出ました。

この答えに対し、先生は「どうやって表や裏だと分かりますか？今、僕らは実物を触りながら、経験を共有しているから、わかるような気がするのです。」と仰いました。この2つの体験を通して、言葉で分かり易く、歪曲せず正確に示すことの難しさについて、改めて考えることが出来たと思います。

さらに、セミナーの後半は、図表と文章の関係について学びました。先生は、花の絵の横に次々と文字を書かれました。「食用」。「これあげる。ありがとう」。どんな文字が書かれるかで、絵が持つ意味は全く違ってきました。また、先生は、「絵と言葉の機能は、independent です。絵は『具体的』、言葉は『抽象的』です。読み手は、どこを見たらいいか分かりません。だから、『この図表のここここが大事ですよ』と、図表を言葉で補う必要があるのです。」と説明してくださいました。

さらに、先生は、「ことばと絵、どちらが良い訳ではありません。両方ないと伝わらないのです。」と仰っていました。

今回のセミナーを受けて、得られたデータを視覚的に分かり易く示す図表と、さらに、それを補う言葉。この2つを上手く使い

こなせてこそ、分かり易い論文を書けるのではないかと思います。それには、やはり、日頃、他人の論文を読むときにも、「自分ならどうするか?」「もっと分かり易く示せる方法はないか?」について考えることが必要になると思います。自分の論文の質を高めるためにも、図表と言葉の関係を常に意識することを、心がけたいと思いました。



事実？意見？ Lesson 2

「事実」と「意見」を区別する

教育イニシアチブ機構

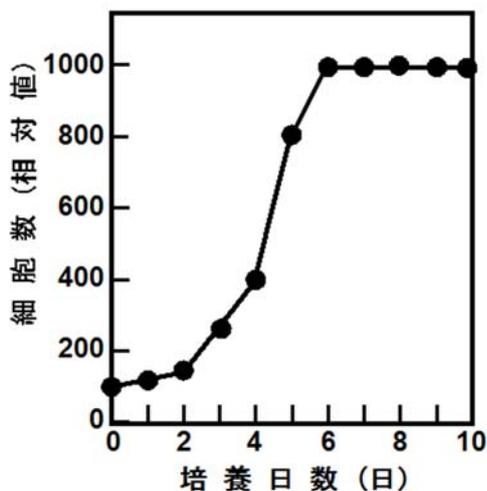
野村港二 先生

中央図書館ラーニング・アドバイザー 人間総合科学研究科 坂井彩希 さん

「客観的な『事実』と、主観的な『意見』を区別する」

ことが今回のセミナーのテーマでした。

前回の野村先生のセミナーの最後では、『事実』と『意見』(あるいは実験における『結果』と『考察』)はどの違うのだろうかという問いが出ました。この問いに答えるべく、今回のセミナーでは、前回の「宿題」の答え合わせから始まりました。その「宿題」とは、「細胞が増える様子を描いたグラフから読みとれる『客観的事実』を挙げる」(下記の図参照)というものでした。「グラフから読みとれる『事実』を書いてください」と言われたものの、改まってそう言われると、「事実」と「意見」はどのように書き分けられるのか、いまいちよくわかりませんでした。すると、先生が「ヒント」を出してくださいました。「『事実』は誰が見ても同じように解釈することができるものであるから、自分の主観が入ってはいけません」と先生はおっしゃいました。このヒントを基に、先ほどの「宿題」のグラフを見てみると、①「日数 X に応じた細胞数 Y の変化を表したグラフである」ことや、②「日数は 0 日目から測定されている」ことなどが、誰が見ても客観的「事実」として挙げられる事柄なのではないかと考えられます。



図：細胞の増殖、最初の日(0日目)に相対値100の細胞を培養液に移植し、毎日細胞の数を計測した。

このような「事実」と対比するかたちで、「意見」とは、『事実』に対するつつこみとして表すことのできる、個人の主観が入ったものであると説明されました。例えば、先ほどの事実①を基にすれば、「グラフの傾きが細胞増殖の速さを示していると考えられる」という「意見」、事実②から「0 日目の細胞数が細胞増殖を考える基礎となりえる」という「意見」を述べることができます。

また、「事実」や「意見」と似た言葉で、現代の日本語では「情報」という言葉がよく使われます。これは、その「中身」が客観的な事実であっても、主観を含む意見であったとしても、送り手にとっての「伝えるべきもの」、受け手にとっての「伝わってきたもの」を示しているのだそうです。そのため「情報」を読みとる際には、時として「事実」と「意見」を慎重に区別しなければならない状況に置かれることもあるとおっしゃっていました。

以上の点をふまえて、野村先生はレポートや論文を書くにあたっての留意点についても言及してくださいました。ひとつめは、文章を書くにあたって誰かの文献を引用する際にも、その文献で書かれている事柄をそのまま「事実」として受け止めるのではなく、「〇〇さんがその当時にそう言った」という「事実」としてメタ的に捉えるということ。ふたつめは、自身の意見を述べる時に、客観的な事実を支えられたエビデンスベースで説明をすることが重要であることです。日ごろ文章を書くにあたって、この2点は非常に重要なポイントだと思いました。自分の意見や主張を述べる際に、それが他の人の意見(あるいは先行研究で述べられていること)とはどの点で異なるのかを明確にしたり、その妥当性を担保する根拠となる「客観的事実」を提示したりすることは、研究を行う上で必要不可欠なステップであると思います。みなさんも、次にレポートや論文を書く時には、上記の点を意識してみるとグレードアップした文章が書けるのではないのでしょうか。

次回よいよ最終回！逸村裕先生のセミナー体験記をお届け！